

円満寺報

第 173 号

平成 30 年 3 月 1 日発行

天台宗 別格本山 安禅院円満寺

〒220-0061 横浜市西区久保町50-1

電話 (045) 231-4383

F A X (045) 241-4499

<http://enmanji-yokohama.jp/> e-mail:enmanji@xb3.so-net.ne.jp

節分会(豆まき)盛大に勤修さる



豆まき参加者の皆様

安禅院第四十世 住職 西 郊 良 光
円満寺第五世

平成三十年の豆まきは、二月三日(土)午後四時より年男、年女及び豆まきの方々三十数名により盛大に勤修されました。当山の総代の方々も、この豆まきが三十回目ということと、土曜日ということと子ども達や近隣の方々が多数参拝される姿を見て、大変すばらしい行事が行われていることに感動して頂いたようでありました。

豆まきの前に、節分会の祈禱法要が行われ、住職及び職員の大般若転読法要が勤修され、厄除け、身体健康、家内安全、交通安全等の祈願が行われたのでした。

何と言いましても今年の二月三日は土曜日ということと、堂外に集まった方々は境内一杯につめかけ、晴天ということもあり大変賑やかな豆まきでありました。また子ども達を見守り、自転車移動の整理に稲荷台小学校の先生方のお手伝いも頂き、何の事故もなくスムーズに行事を行う事ができました。

近年では節分会を行う寺院も数が少なくなり、当寺の節分会は大変賑やかで、皆様に喜んで頂いております。

学校の課外活動、勉強会に招かれて節分会の説明を行ったこともあり、仏教の伝統行事について学習することはすばらしいことでもあります。学校の先生方の視点もまた、伝統行事そのものを見直すということに連なっているのではないかと思っております。

何分年男、年女の方々の厄除けと参加者、豆を拾った方々の平安を祈る姿はすがすがしいものであります。

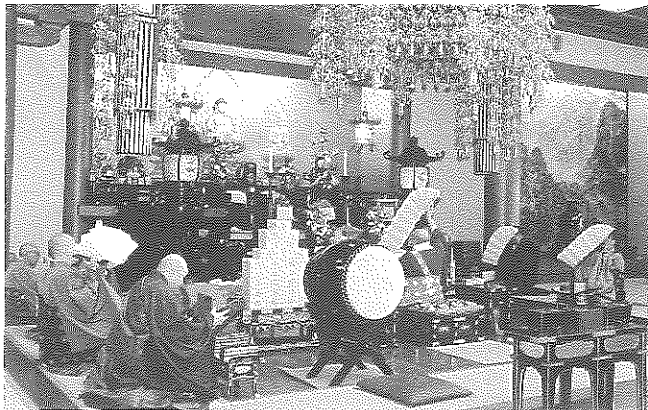
また来年も行いますが、祈禱札を申込む方も多数ございまして、皆様の代わりとなって祈禱が行われ、祈禱札が授与されておりますので、どうぞお申込みくださいますようお願い申し上げます。



袴を着用しての豆まき



福を求める子ども達



本堂での大般若法要



親子連れの方々が多数訪れた

「花まつり仏事・法事講座」

開催のお知らせ

4月8日の花まつり開催を記念し、「花まつり仏事・法事講座」を開催いたします。

円満寺檀信徒が対象の中心となっておりますが、どなたでも参加が可能です。お申し込みは電話、FAX、Eメール等で受け付けておりますのでこの機会にふるって御参加下さい。

記

一、日時

平成三十年四月八日(日)

午後二時～

一、場所

円満寺書院

一、参加費

無料

一、内容

通夜・葬儀といった「いざなう時」を迎えた時に慌てない為の心得や、お盆・お彼岸の仏壇の飾り方、年回法要の準備といった実践的な内容について、円満寺が独自に作成した資料をもとに解説いたします。

また、お焼香の作法や木魚を鳴らすといった体験も行います。当日は花まつりですので花御堂を本堂に出しますので、甘茶をかけてお参りするといった事もできます。

※花まつり仏事・法事講座終了後

「永代供養・相続・生前戒名」等に関する個別相談も受け付けます。なお、個別相談の為、当日対応できる人数に限りがございます。不安な方は事前にお電話にてお問い合わせをお願いします。

申込方法

▼電話 045(231)4383

「花まつり仏事講座」申込とお伝え下さい。氏名、参加人数、御返信先の電話番号をお尋ねいたします。

▼FAX 045(241)4499

▼Eメール

emmanji@xb3.so-net.ne.jp

参加者氏名、参加人数、返信先のFAX番号、もしくはEメールアドレスを表記し件名に「花まつり仏事講座参加希望」と書いてお送り下さい。到着後、4日以内に参加を受け付けした旨の御返信をいたします。万が一返信が来ない場合はお手数ですがお問い合わせをお願いします。

(担当 西野)

春彼岸会によせて

「一期一会」という四字熟語がございます。「一期一会」とは「この出会いは一生においてただけであり、二度とあるものではない。」という意味です。所説は在りますが千利休がこの言葉を残したとされています。これを仏教の言葉で「縁」と言い換えることができます。

また「縁」という言葉を用いた言葉で「因縁」というものがありますが、実はこれは仏教から生まれた言葉なのです。因とは原因であり縁とは結果を表します。つまり、原因があるから結果があり、結果があるというとは何かしらの原因があるということなのです。

例えば、春にひまわりの花の種を植えれば夏にはひまわりの花は咲きますが、秋に種をまいて、冬に花が咲くことはありません。

この場合、花が咲く、ということとは結果であり、縁であります。種を蒔く行為、またその時期が原因、つまり因にあたります。こ

れは私達の日常においても同じことです。お寺で例えるならば、葬式を依頼したなどが因になり、こうして出会えたことが縁でございます。どちらが欠けてもこの出会いは成立せず、同じように出会う機会はないのです。もつと生なら、私たちがここでこうして生きているのは私たちの両親が出会ったからであり、私たちがここにいる日常の背景にはご先祖様の縁のつながりによって起きているのだと言えないではないでしょうか。

さて、もうすぐ春のお彼岸がやってきます。春のお彼岸では、ご自身のご先祖様やこれまでご関係にあった方々に対して思いを馳せてみると、「私にはそういうつながりがあった。あるからこそ、今生かされている」、そんな気持ちを抱くかもしれません。彼岸が終われば入学、入社など新しい環境に身を置く人が多くなります。そこでの出会いも一期一会であり、そのような出会いや縁はひよっとしたら大切な縁になるかもしれません。一つひとつの縁をないがしろにせず大切にすること、そういうことが、より良い「縁」や結果が産むことに繋がるのではないのでしょうか。

円満寺勤行儀

第十回

前回に引き続きまして般若心経の解説になります。

前回までは、この世のあらゆる事象には実態がないという性質があるので、様々な感覚器官や心のはたらきは「一時的な形あるもの」として存在するのだ、という空の性質について観自在菩薩が舍利子に説いていました。そうした性質について、更に様々な事例を挙げて説明を続けていきます。

「無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無知亦無得」

(むむみょう やくむむみょうじん ないしむろうし やくむろうしじん むくじゅうめつどう むちやくむとく)

「前回までの、空の性質があるので」悟りに対する無知といったものもない。無知がないので、無知がなくなることもない。老と死もなく、老と死がないのだから老と死がなくなることもない。苦しみの原因がないので、それらをなくすことができず、その方法もない。知ることも無いのだから、得ることも無い」と説かれています。

例えば、誰も老いや死といった事象は恐ろしく感じてしまう方が多いのではないかと、思います。残酷なようですが、未来永劫老いや死から逃れる方法は現状ありません。

しかし、老いや死から逃れられない事、老いや死からくる「苦しみ」から逃れられない事はイコールではない、と説明をしています。老いや死はそもそも「一時的な形」で

あり、「苦しみ」そのものではありません。「苦しみ」ではないのだからそれら(老いや死)を無くすこともできないのだ、と様々な例を挙げて説明しています。

「以無所得故。菩提薩垂。依般若波羅蜜多。故心無罣礙。無罣礙故無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃」

(いむしよとくご ほだいさつた えはん にはらみつたご しんむげけ むげけこ む むうくふ おんりいつさいてんどう むそう くきょうねはん)

もともと得られるべきものは何もなければ、菩薩(悟りを求めている者)たちは、「智慧の波羅蜜(最高な、完全な智慧)」をよりどころにすることができ、心にこだわりが無い。こだわりが無いゆえに、恐れることも無く、転倒した(間違った)認識によって世界を見てしまうことから遠く離れており、究竟(物事が最後にいきつく先の涅槃(悟りの境地))にいる事ができると、説かれています。

身近なことに置き換えますと、全てが空なのだからという超越した感覚を、私たちが感じることは難しいでしょう。

しかし誰も一度は、何かで思い悩みまたその事柄がどうしようもなく重たく感じる瞬間というものを経験した事があるかと思えます。そうしたときに、般若心経の『空』の考え方をもち、苦しみの原因が苦しみそのものなのではないと思えば、ふと心が少し軽くなるのではないのでしょうか。